
スーパーロボット大戦 the ZEXIS

踊るアゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦 the ZEXIS

【Nコード】

N0585V

【作者名】

踊るアゴ

【あらすじ】

次元の壁が壊れ、数多の世界が一つとなるとき、幾つかの秩序と法が生まれた。だが争いが消える事はなかった。これは一つの世界の变革と、それにより数奇な運命と残酷な試練に巻き込まれた者達の物語である。

「プロローグ」(前書き)

この作品は、「第2次スーパーロボット大戦Z 破界編」の話や設定などを一部いじくっております。なのでそういうのが苦手な人はご注意ください。

「プロローグ」

- ある世界で一つの次元震が起きた。

それにより数多の並行世界の壁は壊れ、一つの世界となった。「次元震動」と呼ばれし大災害が起きてから20年の間、幾つかの国家が生まれた。

だが20年たった今でも、人々の世界から争いが消える事はなかった。これはそんな歪み^{ねじ}扱われた世界で苦悩や葛藤に悩みながらも、明日への希望のために抗い戦い続ける者達の物語である…

???。「…この世界でも人々は争い、憎しみや悲劇が繰り返されているか：ならば私がやるべき事はただ1つ、この世界もまた“箱”の管理をせねばならぬだろう：人類よ、いま一つの結末を知るときが来たのだ！！フハハハハハ！！」

「プロローグ」(後書き)

初めまして、小説はほぼ初心者といっても過言ではありません。さらには世界観とか設定がもしかしたら滅茶苦茶になる可能性もあるかもしれませんが、もしそれでもいいという人はゆるくお付き合いください。

「100万Gの男」（前書き）

多元世界となった一つの世界。その世界は大胆に言えば3つの国に分けられている。一つは世界の1/3を領土としている「ブリタニア・ユニオン」、中国大陸とロシアを中心とした「人革連」、スペインやフランスなどの中東の集合国際連合国家「AEU」である。その3つの国による冷戦状態が続いていた。今回はその中の一つ、ブリタニア・ユニオンでの話である。

「100万Gの男」

（ワシントン）

クロウ「金がない…本当にない…」

とそう嘆くこの長身の青年、名はクロウ・ブルーストという。

なぜこの男がこんなに悩んでいるかというところ…

ゼニトリー「おい、とつとと約束の100万G、早く払え！」

クロウの横で怒鳴り散らす坊主頭の中年は、借金取りのゼニトリーである。

クロウ「待て待て、すぐ仕事を見つけてちゃんと返すから。」

ゼニトリー「ふざけんな！こちとら待ちほうけている暇はないんだ！今すぐ払えねえならこつちも強硬手段をとるぞ！」

クロウ「おつと、俺は暴力には屈しない主義なんでね。」

ゼニトリー「キザな事を言っている暇があつたらさつさと金払え！そう、彼は借金を返せず困っていたのだ。しかも100万Gと言えばこの世界では家一軒買える値段である。

だが二人がもめていた時、巨大な地響きが起きた。

ゼニトリー「うわっ！なつなんだ？」

クロウ「地震じゃねえな…おそらくどつかで誰かがドンパチやってんだらうな。」

ゼニトリー「マ、マジかよ！！冗談じゃない！巻き込まれる前にトンスラだ！」

クロウ「……………」

ゼニトリー「おっおい、何やってんだよ？早く逃げねえと…」

クロウ「悪いな、俺は野暮用が出来た。」

ゼニトリー「おい！そつちは……………」

なんと、クロウは騒動が起きている方に行ってしまったのです。

（アクシズ・ラボ 本社）

そこでは、クロウの予測通り、とあるラボが襲撃にあっていた。
社員「チーフ！早く逃げましょう！」

トライア「冗談じゃないよ。この子を置いて行けないね。」

社員「し、しかし…！」

トライア「せめてこの子を動かせたらね…！」

クロウ「だったら俺が動かしてやるよ。」

社員「なっ！誰だね君は！？」

トライア「ふーん、あんただったら動かせるのかい？こいつを。」

クロウ「俺はできない事は言わない主義でね。」

トライア「OK。あんたの名前は？」

クロウ「俺はクロウ、クロウ・ブルーストだ。」

トライア「あたしはトライア・スコートさ。」

クロウ「さて、早速行くか、えーっと…！」

トライア「試作機ナンバー0（ゼロ）だよ。」

クロウ「なんかその名前はちよつとなー。」

トライア「じゃああなたが決めてやりなよ。」

クロウ「そうだな。じゃあ行くか、“ブラスタ”」

そして、一人の男の戦いが始まる…。

「100万Gの男」(後書き)

一様主人公は「破界編」の主人公、クロウです。とりあえずは此処までです。次回から戦闘に入ります。(修正)土地の場所を間違えてしまいました。ご迷惑をかけて申し訳ございません。

「W・L・F・」世界解放戦線」(前書き)

トラブルに巻き込まれた借金男クロウ・ブルーストは、襲撃されているアクション財団のラボに向かう。そこでクロウはトライアが制作していた期待「ブラスタ」に乗り込み、戦場へと向かって行った

…

「W・L・F・（世界解放戦線）」

（スコート・ラボ周辺）

WLF「我々は世界解放戦線、WLFである！神聖なる志の元、戦争に補助するアクション財団を破壊する！無論、歯向かう者には容赦はせん！！」

そう叫び、アクション財団に攻撃を仕掛けているのは、ここ最近勢力や勢いが増している一段である。

彼らは戦争に手助けをする存在を徹底的に排除する、いわゆる過激なテロ組織なのである。

クロウ「そこまでしな！」

WLF「なんだ！」

彼らの眼に映ったのは、アクションで作られていた機体、ブラスタとそれに乗ったクロウである。

クロウ「お前らなあ、額に汗して働く事を覚えな。」

WLF「アクションの新型か！たった一機に何ができる！」

クロウ「10機か…あれはアクション財団で作られた量産型起動兵器“アクション”だな。」

敵は量産型の兵器、アクションが10機である。

クロウ「だが、俺の敵じゃないな。悪いなブラスタ、俺の操縦は半端ねえぞ。」

そう言った刹那、ブラスタが装備していた0・ダンガンから放たれた銃撃によって敵の機体は1機を残して殆ど撃墜されたのである。

WLF「ば、馬鹿な！！我らの精鋭部隊が…！！」

クロウ「さあ、これで最後だ！」

そう言うと、クロウはブラスタの盾を飛ばし、最後に残っていた敵の機体を真っ二つに切り倒し、戦いはブラスタの圧勝であった。

クロウが出陣してわずか3分で片が付いてしまったのである。

クロウ「ふう、これで終了っ…」

だがその時、異変が起きた。

クロウ「なんだ、このエネルギー反応は？」

トリア「クロウ！その場を離れるんだよ！！！」

クロウ「どうした？」

トリア「その周辺で次元震が発生する！！！」

クロウ「何だつて！！！」

次元震：それは次元の狭間で起きる一種の災害である。次元震の大きさはその場に時空の歪みとなる“次元震動”から発生した土地が丸ごと移動してしまう“次元転移”までである。そして今回起きた次元震は、かなり大きかった。

クロウ（やばいな…かなりデカイぞ）

しかしクロウ達の心配を余所に次元震はそのまま縮小していった。謎の怪物を残して…

クロウ「あれは…、次元獣…。」

「W・L・F・く世界解放戦線く」（後書き）

まずはW・L・F撃破です。戦闘シーンがあったという間に終わってしまいました。戦闘シーンはかっこいいけど描くのは難しいですね。

「次元獣」(前書き)

クロウとブラスタの活躍でWLFを撃退に成功したが、突如起きた次元震によって招かざる客がやって来てしまったのであった…

「次元獣」

クロウ「次元獣…、また厄介なもんが来やがったぜ。」
次元獣……

それは何処からともなく次元の彼方から現れる恐竜の様な姿をした怪物である。

さらにその怪物はコミュニケーション不可能で、現れると周りの物すべてを破壊する

「第一級危険災害」として扱われている。

クロウ「来ちまったもんは仕方ねえ、早いとこ片付けるか！」

トライア「それなら好都合だ。」

クロウ「好都合？」

トライア「そいつの正式名は『対MD撃退用機動兵器 ナンバー0』、つまりそいつは元々次元獣と戦うために作られた機体なのさ。」

クロウ「けどさっき見た限りじゃ少し力不足だが？」

トライア「そりやまだそいつの機動力を完全に出してないからさ。」

いまりミッターを解除するよ。」

そういつて解除ボタンを押した瞬間、ブラスタはとんでもないスピードで次元獣の所まで駆っていったのである。

クロウ「うおお！？」

トライア「どうだい、乗り心地の方は？」

クロウ「いやもうすげえなこいつは…。まあこれなら何とかはなりそうだな。」

トライア「じゃあ、期待してるよ。」

クロウ「ったく、しょうがねえな。そいじゃ、いくぜブラスタ！！」
そしてそのまま次元獣の群れを次々と狩っていったのである。

しかし思ったより数は多く、リミッターを解除したブラスタでも苦戦を強いられてしまっている。

クロウ「クソ！さすがにちと多すぎる。」

だがその時、謎の機体が現れたのです。

五飛「……………」

クロウ「なんだ、あの機体は？」

五飛「弱いな。」

クロウ「！」

五飛「だが無視はできん。行くぞナタク！正義に敗北は許されん！」

ナタクと呼ばれし機体が放った火炎放射により、残りの次元獣達も業火に焼かれていったのであった…

クロウ「す、すげえ…」

五飛「……………」

クロウ「いやあ、助かったぜ。あんたは一体？」

だがクロウが聞く前に謎の機体は何処かに去っていったのであった。

クロウ「礼も言わずか、まあいいか。」

トリア「お疲れさん、なかなかやるじゃない。」

クロウ「まあこれぐらいは朝飯前よ。」

トリア「ところでさっきの機体はあんたの知り合い？」

クロウ「いや、俺も始めて見たぜ。ありや一体…？」

トリア「まあこのご時世だからね、どっかで誰かが兵器を作ってもおかしくはないよ。」

クロウ「……………あのさあ」

トリア「なんだい？」

クロウ「こういつちゃ何だが、御礼を金に両替してくんねえか？」

トリア「はあ!？」

「次元獣」(後書き)

今日はガンダムWの五飛初登場です。

「動き始めた運命」(前書き)

スコート・ラボと周辺の町を襲撃したWLFと次元獣を撃破したク
ロウはラボに戻り、ブラスタの開発責任者であるトライアに事情を
説明するのであった…

「動き始めた運命」

トライア「なるほどね、それで急に金の話になったんだね。」

クロウ「いやあく、面目ない。」

トライア「ほんとだよ。ところでいくらなんだい？あなたの借金。」

クロウ「100万G。」

トライア「はあ！？100万！！まさかそれをあたしにせがもうとしたのかい？」

クロウ「ぶつちやけて言えば……」

トライア「呆れた…とんだ守銭奴だよ。」

ゼニトリー「おい、兄ちゃん。」

クロウとトライアの会話に割り込んだきたのは、クロウに借金の返済を迫っていた借金取りのゼニトリーだった。

クロウ「お、あなた無事だったか。」

ゼニトリー「まあな、さつきは助かったぜ。」

クロウ「お！じゃあ……」

ゼニトリー「言っとくが借金チャラは無しだからな！」

クロウ「ちつ。」

ゼニトリー「とりあえずあなたにはPMCにでも入ってもらっぜ。」

クロウ「PMCにか？」

PMC、早い話が民間の傭兵部隊である。

ゼニトリー「あなたの腕なら問題ないつて。」

トライア「ちよつと待ちな。」

ゼニトリー「何だよ姉ちゃん？」

トライア「ハイ、100万G。これでいいんだろ。」

ゼニトリー「あらま、こりやまいど。おい兄ちゃん、良い人に出会えたな。」

クロウ「なんだ、もう行くのか？」

ゼニトリー「金さえもらえりゃもうあなたにや用はないよ。」

クロウ「ちよつと待った！」

ゼニトリー「な、なんだよ？まさか仕返しなんて言うつもりじゃ…」

クロウ「達者でな、無事を祈ってるぜ。」

ゼニトリー「…へ、最後はかつこよく決めちゃってくれるじゃないの。」

そう言って、ゼニトリーはラボを後にしていったのである。

クロウ「ふっ、決まったぜ」

トライア「何気取ってんだい、あたしが払った分はちゃんと返してもらっからね！」

クロウ「え！マジで。ただで払ってくれたんじゃ…」

トライア「ふざけんじやないよストコドツコイ！そんなうまい話があるか（怒）」

クロウ「…ごもつともで…」

トライア「とりあえずあんたにはこれからプラスタのテストパイロットとしてみつちり働いてもらっからね。」

クロウ「はい。」

トライア「とりあえず、あんたは格闘と射撃、どっちが得意？」

クロウ「俺はどっちでもいけるぞ。」

トライア「OK、じゃあどっちの能力もあげておくね。」

こうして、クロウの借金返済生活が始まったのである。

「動き始めた運命」(後書き)

第一章、完成です。

くクロウの現在借金は、現在100万Gく

世界情勢（前書き）

クロウの初戦も無事に終え、一段落はついた、さて皆さんにこの世界の状況をご説明しよう。

世界情勢

この多元世界は時空変動からすでに20年が経過しており、日本列島と月（月と陰月）が2つずつ存在している。アフリカ大陸の一部と陰月は次元の歪みで侵入不可領域となっており、アフリカ大陸の一部は「暗黒大陸」と呼ばれている。世界は三大勢力と呼ばれる「ブリタニア・ユニオン」、「人類革新連盟（人革連）」、「AEU」の三大国にほぼ分割されており、宇宙にはコロニー群が存在するが、実質的にそれらも三大国の支配下にある。地球上には軌道エレベーターが3基建造されており、オービタルリングが地球を囲んでいる。アストラギウス銀河のギルガメス軍およびバララント軍・並行世界からの超長距離移民船「アイランド・1」は本編開始より2年前に発生した次元震で新たに地球圏に参入しており、ギルガメス軍・バララント軍は両軍とも傭兵集団に転身している。アイランド・1は1国家として正式な国家として認められる。よって正式には4大国として分割されている。

4大勢力

ブリタニア・ユニオン

ブリタニア帝国とのユニオンが合併した、北米大陸を中心とする勢力。首都は帝都ペンドラゴン。元首はシャルル・ジ・ブリタニア皇帝が、首相をユニオンのブライアン・ステッグマイヤーが務めている。南東側の日本列島を含む16の国を「エリア」として支配している。ユニオン製MSとブリタニア製KMFで構成された軍隊を持つ。

エリア11

南東側にある日本の名称。住民達は「イレヴン」としてブリタニア・ユニオンに虐げられている。数年前の次元震で参入したギルガ

メス軍が傭兵としてたむろしている。シンジユクゲッターでは、治安警察がレジスタンスの取り締まりを行っている。

人類革新連盟

通称「人革連」。ロシア、インドなどのアジアを中心とした勢力。中華連邦を内包しているものの、勢力内の足並みは揃っていない。人革連製MSと中華連邦製KMFで構成された軍隊を持つが、中華連邦製KMFはテロリストが主に使用するだけで、人革連としては殆ど使われていない。

A E U

ヨーロッパ勢力。ロームフェラ財団が存在し、OZを特殊部隊として抱える。A E UとOZのMSで構成された軍隊を持つ。軍事面でのトップはトレーズ・クシュリナーダが務めている。

アイランド・1

船団住民の半数にあたる約500万人が生活する巨大居住艦。天窓式のドームに閉鎖式の防護シエルを持つ。その全長は約15kmと従来艦の約2.5倍に相当する。地上面からドーム最上部までの高さは約2,000m。構造材を軽量化するため、艦内の人工重力は0.75Gに設定されている。地表の居住区には港湾部・市街地・丘陵地帯などがあり、地下には歓楽街や物資備蓄スペース、避難シエルター、さらにその下には動力部や環境・重力維持のための装置が備えられている。

エリア 地区

渋谷エリア

東京の渋谷を再現した繁華街。ファッションビル119 109
など若者に人気の商業施設が立ち並ぶ。

世界情勢（後書き）

とりあえず、一通りの国の情勢を説明しました。なお、ブリタニア・ユニオン、人革連、A E Uは冷戦状態ですが、アイランド・1は宇宙にある国家なので、戦場になる事はありません。

参戦作品

無敵ロボ トライダーG7

六神合体ゴッドマーズ

獣装機攻ダンクーガノヴァ

超重神グラヴィオン

真(チェンジ!!)ゲッターロボ(世界最後の日)

真マジンガー 衝撃!Z編

地球防衛企業ダイ・ガード

天元突破グレンラガン

劇場版 天元突破グレンラガン 紅蓮篇

トランスフォーマー アニメイテッド

新機動戦記ガンダムW (TV版)

機動戦士ガンダムOO 1st season

装甲騎兵ボトムズ

装甲騎兵ボトムズ ザ・ラスト・レッドシヨルダー

装甲騎兵ボトムズ レッドシヨルダードキュメント 野望のルーツ

マクロスF

劇場版マクロスF (イツワリノウタヒメ)

コードギアス 反逆のルルーシュ

交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい

宇宙をかける少女

バンプレストオリジナル

参戦作品（後書き）

今回はこの物語の参戦作品をご紹介しましたが、もしかしたら増える予定もあります。

「動き出す者達」(前書き)

スコート・ラボでテストパイロットに任命されたクロウ。しかし彼らが知らない所で動き始めた者たちもいた。これはその者達を描いた新たな物語である。

「動き出す者達」

〈宇宙空間〉

クリス「マイスター達のMS、すべての起動準備完了しました。」
ラッセ「OK、こつちも準備完了だ。」

フェルト「トレミーの調整も全て完了しました……」

イアン「しかしトレミーまで出しちまうとは……」

スメラギ「仕方ないわ、事態はそれだけ急を要することなのだから。」

┌

クリス「全ての準備整いました。スメラギさん、お願いします。」
スメラギ「ええ、わかったわクリス。これよりソレスタルビーイングは次の行動を開始します。マイスター達は直ちにガンダムに乗り込んで待機してください。トレミー、発進……！」

〈エリア11 学園クラブハウス内〉

ナナリー「それじゃあ、おやすみなさい、お兄様。」

ルルーシュ「ああ、お休み、ナナリー。」

そう言つとルルーシュという名の青年は、メイドの咲世子に妹のナナリーを任せ、2階の自室に戻つていった。

????「遅かつたな、妹との会話は済んだか、坊や。」

ルルーシュ「黙れ、魔女。ところでちゃんとカレン達には今度の作戦は伝えたのだからな? C・C・?」

C・C「ああ、ちゃんと伝えたぞ。」

ルルーシュ「よし、これで明日の計画は完璧だ。問題は……」

C・C「今度こちらに来るスーパーロボットの連中か。」

ルルーシュ「だが問題ない、俺にはこのギアスがあるから……」

C・C「なら精々頑張れよ、“ゼロ”よ。」

〈日本 羽田国際空港〉

赤木「お、ワツ太じゃねえか！」

ワツ太「あ、赤木さん！もう来てたんだ。」

赤木「まあな、あれ？専務達は来てないのか？」

ワツ太「ああ、専務達は別の仕事で今日は来れないんだ。」

赤木「じゃあ“竹尾ゼネラルカンパニー”はワツ太一人だけかよ？」

ワツ太「まあでも大丈夫さ。だって俺は社長だからな！」

いぶき「偉いわねワツ太は。赤木君もちよつとは見習いなさいよ。」

青山「そうそう、いい大人なんだからな。」

赤木「んなもん言われなくてもわかってるよ。なんせ俺達は“21

世紀警備保障”の社員だからな！」

甲児「相変わらず元気ですね。」

赤木「よう、甲児！タケルも一緒か。」

甲児「はい、この間は色々お世話になりました。」

赤木「いやいや、いいのいいの。」

タケル「皆さん、そろそろ出発しないと。」

赤木「本当だ！やっべえ。」

いぶき「それじゃあ、行きましようか。」

ワツ太「おー。」

タケル「・・・」

甲児「どうしたタケル？」

タケル「ちよつと気になる事があってね・・・」

甲児「気になる事って？」

タケル「いや、なんでもない。早く行こうか。」

甲児「おう！」

（ドラゴンズハイヴ）

田中「いや、チームDの皆さん、お疲れ様です。今回もいい活躍
で。」

葵「それはどうも・・・」

田中「皆さんお疲れでしょう、ゆっくり休んでください。明日は中

々の大仕事になりそうですから。」

くから「明日もどこかの有利な勢力と戦うの?」

田中「それがダンクーガノヴァのやるべき事ですから。」

葵「それで、今度はどこに行ったらいいの?」

田中「エリア11ですね。」

朔哉「エリア11、あそこって確か…」

ジヨニー「謎の怪人『ゼロ』率いる“黒の騎士団”の話で持ちきりになってる島ですね。」

くから「まさか黒の騎士団と戦えって言うんじゃないあ…」

田中「いえいえ、その逆です、皆さんには、ゼロの手助けをしてもらうのですよ。」

葵「あれ、でも今はゼロが優勢に立ってるんじゃないあ?」

田中「どうやら今度の相手は、コーネリア率いるブリタリア・ユニオン軍のNMF・MSとPMCのレッドシヨルダーが協戦するらしいので。」

朔哉「常勝のコーネリアと一騎当千のレッドシヨルダーが相手とは…」

ジヨニー「それならゼロに加担する理由も納得ですね。」

葵「OK、わかったわ。明日は今までにない刺激がありそうね。」

〜早乙女研究所〜

武蔵「しかし博士も無茶言うよなあ〜。まさかエリア11で人暴れしてこいとよ。」

隼人「博士の話じゃあインベーターがああ辺りに来ていると言っていたらしいが…」

武蔵「んなことになったら大惨事じゃねえか!」

隼人「おそらくNMFやMS・ATでは歯が立たんだろうな。」

竜馬「へっ、何処だろうが関係ねえ!インベーターは俺達ゲッターチームがぶっ潰す!!!」

武蔵「お、張り切ってるな、竜馬。」

隼人「その張り切りが余計なトラブルを呼ばなきゃいいがな。」

〈サンジェルマン城〉

琉菜「じゃあ次にゼラバイアが現れるのは…」

ミズキ「ここ、エリア11みたいね。」

エイナ「こんな所でゼラバイアが現れたら大変ですよ！」

斗牙「此処はそんなに人が多いの？」

エイジ「それだけじゃねえ、ここには貴族や皇族なんかのお偉いさんがいるからな。その人達になんかあつたら国際問題になっちゃうぜ。」

リイル「それはまずいと思います・・・」

エイナ「そう言えばそこはゼロという人もいましたね。」

エイジ「いや、さすがに噂の怪人でもゼラバイアはキツイだろ。」

ミズキ「じゃ、やる事は一つね。」

斗牙「ああ、ゼラバイアは、僕達グランナイツが討つ！」

そして、来るべき、5月15日・

大いなる戦いが始まる…

「動き出す者達」(後書き)

新シリーズのプロローグみたいなものです。

状況を説明しますと、ルルーシュがコーネリアとフジ決戦をする前日です。

そこにガンダムやスーパーロボットが入ったらルルーシュが圧倒的に有利なので敵もたくさん入れてみたらかなりやばい事になったかも・・・

「クロウ、エリア11へ飛ぶ」(前書き)

少々待たせてしまってすいません。今日から新シリーズです。まあ皆さん、ゆるくお付き合いください。

「クロウ、エリア11へ飛ぶ」

クロウ「最近よお、うちの嫁がさあ、もつと稼いで来いってうるさいんだよ。俺もさあ、一生懸命頑張ってはいるんだけどなあ…、不景気って残酷だよなあ。よし！今日は朝まで飲むぞー！！！オヤジ、がんもとこんにゃくと…」

トリア「って何やってんだお前はー！！！！」

トリアが何故か持っていたでかハリセンで、クロウが張り倒されたのである。

いわゆるツツコミである。

トリア「まったく、ツツコミ所が多すぎてどっから突っ込めばいいのかわかりやあしないよ（怒）」

クロウ「な…ナイスなツツコミで…」

トリア「ほら、さっさと立ちな。今から仕事をしてもらうんだから。」

クロウ「また次元獣退治か？」

ブラスタは元々対次元獣用なので次元獣の討伐に回されるのは不思議ではないが、クロウは少々マンネリ化していたのである。

トリア「いや、あなたには今からエリア11に行ってもらうさ。」

クロウ「エリア11？またなんで…」

トリア「あんたも“ゼロ”やその組織の事は知っているだろ。」

クロウ「まあな。」

ゼロとは、前エリア11総督であるクロウイス殿下を暗殺し、エリア11のブリタニア・ユニオン軍と激戦を繰り広げているレジスタンス『黒の騎士団』の首領である。ただ、仮面とマントを被っているため、正体はおろか、性別なども不明なのである。

クロウ「なんだ、黒の騎士団の戦闘データでも撮って来いっていいのか？」

トリア「いや、今回の仕事は黒の騎士団とは関わったりはしない

さ、ただ、一応注意はしておいた方がいいと思っただけね。」
クロウ「？」

トライア「この間こつそり手に入れた極秘情報なんだけど、黒の騎士団の所には今、コロニーのガンダムとギルガメスの兵、おまけにダンクーガもいるらしいよ。」

クロウ「マジか！？エライ組み合わせじゃあねえか。」

トライア「コロニー解放を目的とするコロニーのガンダム、有利な方の敵になるダンクーガ、そして傭兵部隊の陣営の一つであるギルガメスの兵、そしてエリア11の解放を目指す自称“正義の味方”の黒の騎士団：はつきり言っただけでもない組み合わせさ。」

クロウ「そんなメンバーと戦わされるブリタニア・ユニオンも気の毒に。」

トライア「そうでもないさ。あつちはあつちで常勝のコーネリアにレッドシヨルダーもいるらしいからね。」

クロウ「あゝ、それだったら納得。」

トライア「まあどっちにしてもかなりの被害が出るのは確かだね。」

クロウ「じゃあなんだ？もしかしてスーパーロボットの手伝いか？」

今エリア11ではとある建物の建設のために、もう一つの日本から有名な企業会社『竹尾ゼネラルカンパニー』や『21世紀警備保障』などが来る事になっているのである。

クロウ「噂じゃクラッシャー隊やマジンガーって名前のスーパーロボットまでいるって話だ。だがそんぐらいだったら俺必要か？」

トライア「違う違う、それでもないよ。」

クロウ「はあ、じゃあ何しに行くんだ俺は？」

トライア「実はね、これはまだあまり知られていないんだけど、エリア11にソレスタルビーイングが向かっているという情報が入っているんだよ。」

クロウ「なんだって！」

ソレスタルビーイングとは、すべての紛争に武力介入を行うという宣戦布告を宣言し、実際起動エレベーターのテロの撃退や内戦の制

圧も行っているらしいのである。

トライア「そこであんたにはソレスタルビーイングの調査を行ってほしいのさ。」

クロウ「えらい無茶を言ってくれるぜ…だが、やるからにはきちんとやるぜ。」

トライア「報告楽しみにしてるよ。」

クロウ「ま、期待しないで待っていてくれ。」

その翌日、クロウはブラスタを乗せた小型船でエリア11に向かって行ったのである。

「クロウ、エリア11へ飛ぶ」(後書き)

今回から新章突入です。

「正義、解放、刺激、傭兵」(前書き)

クロウがエリア11へ出向する前日、ある組織のある計画の最終確認が行われていた。

「正義、解放、刺激、傭兵」

（シンジユクゲッター 黒の騎士団アジト）

デュオ「えーと、おいカレン、これは此処でいいのか？」

何かを確認するために訪ねたおさげ髪の少年は、コロニーから来たガンダムパイロットの一人、デュオである。

カレン「ああ、それは重要な物だから大切に扱ってよね。」

強気な発言をする赤髪の少女、カレンは、デュオにそう注意しながら作戦の準備に取り掛かっていた。

デュオ「所でよ、カレン、今回の作戦は大丈夫なのか？」

カレン「何よ急に……」

デュオ「いや確かにこの作戦はすごいが、失敗したら敵だけじゃなくて周りの町も被害が出るぞ？」

デュオが心配している作戦とは、敵を指定した位置までおびき寄せ、用意したサクラダイトの爆弾で山を爆発させ、土砂崩れを起こして敵の数を減らす。という作戦のだが、その山の近くには町があり、失敗すれば大勢の民間人を巻き込みかねないのだ。

カトル「そうならないようにするのが今の僕たちの役目ですよ。」

金髪の青年、カトルが心配するデュオを慰める。

葵「そうそう、あたし達がしっかりしないとね、カレン。」

カレン「もちろんだとも。今の私達は正義の味方なんだ！民間人を巻き込んでたまるもんか。」

ダンクーガのパイロットである葵の励ましに、なおさら気合いが入るカレンだった。

デュオ「そう言えば他のメンバーは？」

カトル「ヒイロとトロワは作戦地域の確認、扇さんや他の騎士団は機体の整備、ジヨニーさんはゼロと作戦の内容確認をとっています。朔哉君とくらさんは町の様子を見に行っています。」

デュオ「OK。ってあれ、キリコは？」

カレン「キリコも自分の機体のチェックをしているよ。」

デュオ「まあ、AT乗りにとってATは自身の棺桶みたいなもんだからな、ちゃんと見ておきたいんだな。」

彼らが話しているキリコという人物は、一週間前、ゼロと協力関係にあるアストラギウスの人間であるゴウト・バニラ・ココナがパドリングと呼ばれるAT・NMFの裏格闘技で使っていたAT乗りであるが、今は騎士団の戦力として活躍している。

デュオ「よし、準備完了だ。」

葵「こっちもOKよ。」

カレン「じゃあみんな、明日もよろしくね。」

そう言ってカレンを除く全員が部屋から退出していった。

カレン（明日は大切な戦いだ、絶対に負けるもんか…！）

そうして黒の騎士団とその協力者たちの夜は更けていった…

「正義、解放、刺激、傭兵」（後書き）

まずは黒の騎士団の戦闘前夜です。ちなみにタイトルについては、正義がコードギアス、解放がガンダムW、刺激がダンクーガノヴァ、傭兵がボトムズのイメージです。

「民間人の思い」（前書き）

運命の日、とある場所では、もう一つの日本から来たスーパーロボ
ット達が建設作業を行っていた…

「民間人の思い」

トウキヨウ疎開

甲児「赤木さん、これはこっちでいいんですよね？」

赤木「ああ大丈夫だ。それとこれ運ぶの手伝ってくれ甲児。」

甲児「わかりました。」

建設材料を運んでいたのは、マジンガーと呼ばれるロボットに乗る少年、兜甲児と民間企業用として作られたスーパーロボット、ダイ・ガードに乗っているサラリーマン、赤木俊介である。

ワツ太「赤木さん、こっち終わったよー。」

赤木「サンキューワツ太。じゃあこれ運び終えたら休憩タイムだ。」

ワツ太「ヤッター！じゃあ郁絵ちゃん達に知らせてくるね。」

赤木「よっし、甲児、さっさと終わらせ……」

甲児「こっちはもう終わりました。」

赤木「早っ！！凄いな甲児、もうだいぶマジンガーを使いこなせてるじゃないか。」

甲児「いや、まだまだだよ。もっとうまく扱えるように頑張らないと、お爺ちゃんも心配するから。」

彼の祖父、兜十蔵は、Dr・ヘルと呼ばれる男が率いる機械獣と鉄仮面軍団の戦いの中で、甲児にマジンガーZを託して亡くなってしまったのである。

赤木（爺さんを失った時はだいぶ落ち込んでいたけど、もう大丈夫のようだな……）

ワツ太「赤木さん、甲児さん、おやつを用意が出来たよ。」

赤木「おっし、じゃあ休憩にしますか。」

甲児「はい。」

梅麻呂「郁絵くん、今日のおやつは何かね？」

郁絵「皆さんの元気が出るどら焼きです。」

赤木「お、いいねえ。疲れた時は甘いもんが一番ってね。」

いぶき「もう、調子いいんだから。」

青山「ま、そこがそいつの取柄みたいなもんですからね。」

さやか「甲児君、お疲れさま、はいお茶。」

甲児「ああ、ありがとう、さやか」

一緒に休憩しているのは竹尾ゼネラルカンパニーの社員、梅麻呂専務・

郁絵・厚木・木下と、21世紀警備保障の社員でダイ・ガードのサ

ブパイロットであるいぶき・青山、そしてマジンガーと同じ超合金

でできたアフロダイAのパイロット、弓さやかである。

彼らは現在、合同作業として同じ仕事を手伝っているのである。

ちなみに実はもう一人彼らの仕事を手伝っている人がいるのだが：

ワツ太「あれ、タケルさんは？」

甲児「あれ？さっきまでいたんだけど…」

郁絵「タケルさんなら向こうで休憩してましたよ。」

ワツ太「そっか。じゃあ俺タケルさんにどら焼き分けてくるよ。」

タケル「……………」

ワツ太「タケルさーん。」

タケル「ワツ太か、どうしたんだい？」

ワツ太「これ、どら焼きのおすそ分け。」

タケル「ああ、すまない。」

ワツ太「どうしたのタケルさん？なんか元気ないけど。」

タケル「……………」

ワツ太「もしかして、ギシン星の人達が気になるの？」

ギシン星とは、超能力を使い地球侵略をたくらむ異星人の事である。

この明神タケルも実はギシン星人で、彼は地球を破壊するために反陽子爆弾と共に送られてきたのである。だがタケル自身が地球を愛

していたため、皆で地球を守る事になっているのだ。

タケル「いや、そつちは今のところ向こうのクラッシャー隊から問題ないとの通信が来ているから大丈夫だ。」

ワツ太「じゃあ何で悩んでるの？」

タケル「俺が気になっているのは…」

甲児「エリア11にいるゼロの事だろ。」

タケル「赤木さん、それに甲児も。すみません、心配をかけて…」

赤木「いいのいいの、ぶつちゃけ言つと俺達も気になっちゃってさ。」

「

ワツ太「赤木さん達も？」

甲児「ワツ太もかい？」

ワツ太「だって気になるじゃないか。同じ国の人間なんだし。」

赤木「そうだな…」

ワツ太「それにゼロがどんな顔してるのか気になって気になって。」

赤木「つてそつちかよ！」

ワツ太「え、違うの？」

甲児「タケルが言いたいのは、俺達がゼロと戦うかもしれないって

ことさ。」

ワツ太「ええ！マジかよ！！」

タケル「今俺達がエリア11にいる以上、彼らと関係ないことはな

いから…」

甲児「確かに彼らと戦うのはちょっと…かといって協力すれば俺達

もテロリスト扱いされちゃうしな。」

タケル「……………」

甲児「……………」

赤木「はいはい、辛気臭い顔しない。まだ仕事をしなくちゃならな

いんだからな。」

タケル「…そうですね、早く仕事を終わらせましょう。」

ワツ太「ところで赤木さん、次はどこで作業するんですか？」

赤木「え〜と確か、ナリタだな。」

そうして彼らは運命によって出会うことになる。
もう一つの日本の戦いに巻き込まれながら・・・

「民間人の思い」（後書き）

今回は日本組のお話です。彼らは今仕事でエリア111にきていますが、もうじきある戦いに巻き込まれていくのです。

「巻き込まれし運命(さだめ)」(前書き)

東京疎開の仕事を終えた赤木達は、次の作業現場であるナリタに向かっていた。

「巻き込まれし運命(さだめ)」

「ナリタ山脈付近」

甲児「今日の作業はどんな予定ですか？」

赤木「そうだな、この間と同じで、建設作業の手伝いだな。」
ワツ太「それならすぐに終わりそうだな。」

移動する車の中でのんびりしている赤木達の所に、監督責任者である城田が話に入ってきて来た。

城田「一様は仕事だ。ちゃんとしろ。」

赤木「大丈夫ですよ城田さん。現場作業はいつも本気ですから。」

青山「そのやる気を机作業の方でも出してほしいもんだな・・・」
青山が皮肉な言葉を言った。

その時、赤木達が乗っていた車が止まってしまったのである。

赤木「あれ？もう着いたのか？」

タケル「いや、まだ目的地は先だけど？」

城田「ちよつと待て、私が様子を見に行ってくる。君達は此处で待機だ！」

そう言つて城田が車を降りれば、車の前に歩道を封鎖していたブリタニア軍が何人もいたのである。

城田「すみません、何かあったのですか？」

ブリタニア軍「何だお前は？誰の許可でここに来た！」

城田「失礼、私は城田、21世紀警備保障の責任者だ。なぜこの道を封鎖しているのですか？」

ブリタニア軍「ふん、あいにく民間人に教える事ではない、帰れ！」
部隊の隊長らしき人物に軽くあしらわれてしまう。

その様子を赤木達はこっそり見ていた。

いぶき「なによあれ、感じワルう。」

ワツ太「ほんとだよ。何があったかぐらい教えてくれたっていいじゃないか。」

タケル「まさか・・・」

メンバーが嫌悪している中、タケルだけは何か嫌な予感を感じていた。

城田「事情さえ話していただければ我々はすぐにここを去りますので。」

ブリタニア軍「黙れ！イレブン風情が生意気な！！」

隊長の男は、顔を歪めてそう言い捨てた。

城田「イレブン…？ちょっと待って下さい！何か勘違いされているようですが、我々は此処の国の者ではありません。」

ブリタニア軍「そんなこと知った事か！失せないのなら…」

男は懐から銃を取り出し、城田へ向けた。

赤木「城田さん！」

甲兎「やめろ！相手は民間人だぞ！」

甲兎たちが飛びかかるうとしていたその時、

兵士「隊長〜！」

遠くの方で部隊の人らしき人物が男を呼び出す。

ブリタニア軍「何だ？」

兵士「山頂の方から黒の騎士団が出現！それに日本解放戦線の兵士である藤堂鏡志郎と四聖剣も一緒です。」

ブリタニア軍「何だと！」

藤堂鏡志郎とは、7年前に起きた極東事変で唯一ブリタニアに泥を塗った日本軍人である。かつては日本解放戦線にいたが、どうやら今は黒の騎士団というようだ。

兵士「それとコーネリア殿下からの伝言で、封鎖部隊の隊長達は直ちに本隊と合流するようにと。」

ブリタニア軍「ええい仕方ない！私と一部隊は本隊と合流し、殿下のもとに急ぐのだ！」

兵士「あのー、私は…？」

ブリタニア軍「全員が行ってどうする！おまえは此処で居残りだ！」
兵士「りよ、了解しました！」

隊長の男はそう言って連絡した兵士を残して、自分の部隊全員で山奥に向かって行った。

赤木「ふう〜、良かった〜。一時はどうなる事かと。」

甲児「大丈夫ですか、城田さん？」

城田「私は問題ない。だが…」

どうやら作業はできない状況であることを城田は悟っていた。

城田「各員は撤収準備！今日の仕事は中止だ！」

ワツ太「ありやま、今日は休業になっちゃったよ。」

梅麻呂「私達にとっては一大事！」

城田「現状が現状だ！やむを得まい。」

郁絵「城田さん、大変です！ナリタ上空で界震が！」

城田「何っ！こんな時にか。」

いぶき「ちよつとどうするのよ？」

木下「行くにしてもナリタは今、騎士団とブリタニア軍の戦闘地になっっていますし…」

甲児「けどヘテロダインはNMFじゃあ倒せませんよ。」

彼らの言うとおり、ヘテロダインは、核コアと呼ばれる心臓部分を壊さねば再生してしまう怪物なのである。

赤木「だつたらやる事は一つ！俺達もナリタに向かうぞ！」

さやか「ええー!!!」

城田「おい待て赤木！我々が言ったら邪魔になるだけだぞ！それに戦場では何が起ころかわからんぞ！」

赤木「その時は気合と根性でカバーだ!!!」

大声で叫ぶと、赤木は乗っていた車を運転し、封鎖ゲートを破壊する。

赤木「いぶきさん、青山、早く行きますよ！」

いぶき「仕方がないわ、行くわよ、皆！」

青山「お、おい！冗談だろ！」

甲児「どうします、タケルさん。」

タケル「こうなったら仕方がない、俺達も向かうぞ！」

城田「おい！ちよつと待て…」

城田が制止する前に、赤木達を乗せた車はそのままナリタへ向かっていた。

梅麻呂「ああ、社長おゝ。」

木下「私達を置いてかないでえ。」

兵士「ああ、なんて事を！俺が隊長に殺されるー！」

城田「まったくあいつらは…、申し訳ありません。後できちんと謝罪いたしますので。」

詫びをし、城田と梅麻呂達は車を追いかけて行った。

兵士「ど、どうしよう…。」

兵士が茫然とした様子でその場に立ちすくんでいた時、一本の電話が入って来た。

兵士「はい、なんでしよう。」

ブリタニア軍「何をやっている！早くコーネリア殿下に伝えるのだ！」

兵士「へ、何をです？」

ブリタニア軍「エリアー１にソレスタルビーイングと、所属不明の機体が幾つか入国したのだ！」

兵士「ええ

！！」

「巻き込まれし運命(さだめ)」「(後書き)

ついにナリタにやってきました。此処からドンドンいろんなキャラが出てきます。

緊急のお知らせ

只今、自分のPCがインターネットに繋がらなくなったため、次の更新はしばらく未定になります。ご迷惑をおかけします。 < ? 土下座

いつ治るかは不明ですが、PCが使えるようになり次第、きちんと物語も進行しておきますので、どうかしばらくお待ちください。

なお、感想やメッセージは何か出来ますので、何かメッセージがあれば遠慮せずに言っちゃっても構いません。

この小説の続きを楽しみにしてらっしゃる皆様方には大変ご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。

「ナリタ戦線」(前書き)

ナリタ戦地で起きた界震の調査をするため戦場へ乗り出す赤木達。

一方、ナリタ攻略を行うために戦線に出たコーネリア達にも思わぬ朗報が飛び込んできたのだった…

「ナリタ戦線」

「ナリタ攻略戦 前線基地指令室」

コーネリア「何っ！ソレスタルビ・イングが。」

ギルフォード「はい。それと未確認の機体もいくつかこちらに向かって来ているらしく」

コーネリア「ええい、ただでさえ騎士団共に手を拱いているというのに！」

前線基地では、黒の騎士団との戦いの為に指揮をとっている第2皇女コーネリアがいつにもまして厳しい表情で情報を聞き出していた。コーネリア「ソレスタルビ・イングは、両方の勢力を潰すつもりなのか？」

ギルフォード「それはまだ分かりませんが、その可能性は高いと思われまます。」

コーネリア「くっ、各部隊隊長達とグラストンナイツ達に伝える！ソレスタルビ・イングの迎撃準備をさせるのだ！奴らにエリア11の地を踏ませるな！！」

ギルフォード「未確認の機体はいかがいたしましたしょう？」

コーネリア「当然！無断で入るような狼藉者も排除しろ！！」

リーマン「お待ち下さい、コーネリア閣下」

コーネリアの命令に異議を唱えたのは、傭兵部隊「レッドシヨルダ」の最高司令官、リーマン將軍であった。

ギルフォード「貴様！姫様の命令に逆らうか！」

リーマン「そうではありません、未確認の機体の方は迎撃する必要はございません。」

コーネリア「どういうことだ？」

リーマン「機体の正体は此方で既に調査済みです。まだ片方しかわかっていませんが、3機の飛行機らしき機体は「ゲッターロボ」と呼ばれているものです。」

ギルフォード「ゲッター？確か日本の早乙女博士が開発したという
対インベーター兵器ですか？」

リーマン「そうです。そして、奴らが来ているという事は、おそらく
此方の方にインベーターが来ているかもしれませぬ。」

コーネリア「何だと！あの化け物までこちらに向かって来ているの
か！？」

リーマン「そちらはまだ調査中ですが可能性は高いでしょう。そう
なったら下手に我々の部隊を入れるのは防衛ラインを崩してしまい、
ゼロに隙を作ってしまうことになります。」

コーネリア「どの道不法侵入機も化け物も入れてしまうということ
ではないか！」

リーマン「ですがこの情報はまだこちらにしか入っておりません、
そこで、彼らを騎士団のテリトリーまで誘導するのです。」

ギルフォード「なるほど、騎士団とゲッター、インベーターをぶつ
けるという事ですね。」

コーネリア「ちょっと待て、ゼロがインベーターなどにやられてし
まったら、本国に何と言えば」

コーネリア自身も騎士団とインベーターの共倒れは別に構わないし
むしろ大歓迎なのだが、そしたらゼロ討伐の手柄を最悪ゲッターに
奪われてしまいには人の手を借りないと反逆者一人も倒せない無能
者として本国に扱われてしまう屈辱をコーネリアは我慢ならなかつ
たのである。

リーマン「それならご心配なく、向こうにも幾人か腕の立つ者が何
人かいたようですし、ゼロがあればしきの連中で殺されることはない
でしょう。インベーターを倒すのに疲労した連中を叩くもよし、イ
ンベーターに部下を殺され、独り身になった所を拘束すればよし、
やり方を考えれば、閣下に汚名を付けずに、成果を出せます。」

コーネリア「くっ……」

リーマン「彼らの誘導役は我々レッドシオルダーが引き受けましょ
う。閣下の有能な騎士たちを低俗な化け物ごときに振るうのはもっ

たいたいのですから。」

コーネリア「……わかった、インベーター及びゲッターの誘導は貴様に任せる。」

リーマン「了解しました。では失礼します。」

そう言つて、リーマンは指令室から去つて行つた。

ギルフォード「よろしいのですか？」

コーネリア「いい訳ないだろう！だが、だからと言って私の部下に化け物の相手までさせる必要はないからな。」

ギルフォード「姫様……」

コーネリア「それよりギルフォード、前線にいるダールトン將軍にも伝える、部隊の幾つかをゼロとの戦闘部隊とソレスタルビ・イングの討伐部隊に分ける。その後、騎士団をテリトリー内までに誘導するのだ。奴らを籠の鳥にするのだ！」

ギルフォード「イエス！ユアハイネス。」

〔前線基地 A T 用倉庫〕

リーマン「コニン少尉、準備は出来たか。」

コニン「はい將軍。既にインベーター誘導部隊とソレスタルビ・イング・ゲッターの討伐部隊は出動しました。」

リーマン「よし、ではコニン少尉は裏道から回つてゼロを監視しろ。絶対に気づかれるなよ。」

コニン「了解！」

コニンは急いで自分の A T に乗つて戦場に賭け向けて行つた。

リーマン「どうやら、この戦い、思った以上の物が手に入りそうだな。」

不審な笑みを浮かべるリーマンの手には幾つかの書類がまとめられていた。

リーマン（元トッププレーサーの飛鷹葵にシュタットフェルト家の令嬢、巖島の奇跡までいるか、だがこいつらならどうとでもできる。

問題はこいつらか……）

現在黒の騎士団と共にいる元ギルガメス兵、キリコ・キュービー
と…

ルルーシュ・ランペルージの情報書が入っていた
リーマン（ふふ、まさか死んだはずの皇子がまだいたとはな、おま
けに王の力も手にしていたか…。^{ギアス}ペールゼン閣下、どうやら貴方には
よい土産がありそうです。）

そう、彼は既にゼロの正体を知っていたのである。さらに彼は、ゼ
ロが持っている不思議な力、ギアスの事も既に承知済みなのである。
リーマン「キリコ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、貴様らの存在、
この俺が確かめてやる！」
そして一つの陰謀が静かに動き始める。

「ナリタ戦線」(後書き)

今回はブリタニア軍サイドで御送りしました。

更新が遅れてしまい申し訳ありません。とりあえず今は友人のPCを借りて更新させて頂いてます。前より遅くなるかもしれませんが何とぞよろしく願います。

「遅れてきた借金まみれ」(前書き)

エリア11で様々な思いや陰謀がうごめく中、クロウは貨物飛行船で戦場の地へと向かっていた。

「遅れてきた借金まみれ」

くナリタ付近 上空

クロウ「にしてもえらい状況だな、これは。」

飛行機を操縦しながら黒の騎士団とブリタニア軍との戦争の地となっているナリタの現状を見てクロウは啞然としていた。

所々で無残な残骸となり果てている双方のNMF、水溜りのように溜まっている血の集まりには大量の兵士や騎士団の死体が転がっており、中には頭が粉碎しているものや、下半身が抉り取られた者もあった。生き残っている者達も、NMFでの一方的な弾圧に命を落としたり仲間を失ったショックで正気を失った者も沢山いたのである。

クロウ「こりやひでえ…どっちもただの殺し合いになってやがる。」
そこでクロウにある疑問が浮かび上がる

クロウ「騎士団のゼロは今までこんなひどい被害を出してはいなかったはずだ…だが今の現状は違う。」

クロウの知っている限りでは、ゼロという人物は最小限の被害、あるいは首領や指揮官を潰して早めに戦闘を終息させるなど、余計な被害を出さないようにしている人なのだ。だが今の被害は最小という言葉では収まりきれないほどの事態となっている。

クロウ「この状況にこの惨劇…まさか」

***「こ…らは…タニ…である。そち…所ぞ…を…たえる…」

クロウ「なんだ？えらく電波悪いな？」

酷いノイズが走って聞き取りにくかったが、どうやらブリタニア軍からの通信だったようである。だが電波が悪いらしく、通信はすぐに切れてしまう。

クロウ「なんか嫌な予感がするぜ、すぐに調べてみるか。」

くナリタ山上付近く

ジヨニー「ミサイルデトネイター!!!」

巨大な機体、ダンクーガノヴァのパイロットの一人であるジヨニーが、腰に装着されていたミサイルを数発発射し、敵のブリタニア軍を迎撃する。

朔哉「しつかしよお、いくらなんでも敵多すぎないか？」

ジヨニー「確かに、エリア11の兵力にしては数が多すぎる。本国に増援を要請したのでしょうかね？」

くから「これ以上相手にしていたら合体の制限時間が過ぎちゃうわよ!」

実は彼らが乗るダンクーガは一定時間を超えると機体がオーバーヒートしてしまうため、その前に合体を解除しないといけないのである。

葵「だったらさっさと終わらせるわよ!」

メインパイロットである葵が喝を入れる。

その直後、別の方で敵の相手をしていたカレンから連絡が入って来た。

カレン「葵! 大変なのよ!」

葵「どうしたのカレン?」

カレン「ゼロが…、ゼロが…!」

葵「ちょっと落ち着いて。ゼロがどうかしたの?」

カレン「ゼロが何処にもいないのよ! 通信もできないし…!」

朔哉「まさかやられたんじゃない?」

葵「そこ! 縁起でもない事言わないの! カレン、そっちの敵を倒したらポイント2013で合流しましょう。私達も探すの手伝うから」

カレン「わかったわ。気を付けてね、葵。」

葵「OK。」

通信を切った後、葵達は改めて気合を入れ直す。

葵「よっしゃ、それじゃあさっさと敵倒して、ゼロ探しに行くわよ

「……」

「「おっ……」」

「遅れてきた借金まみれ」（後書き）

クロウさん、久々の登場です。戦場はかなり混乱している状況になっております。戦場の状態の伝え方が解りにくかったらごめんなさい。> (| |) <

「策略家vs傭兵部隊隊長」(前書き)

ゼロと連絡が取れなくなり、混乱する前線の黒の騎士団。実はそれには、ある訳があったのだ。...

「策略家vs傭兵部隊隊長」

「ナリタ山中 樹海」

ルルーシュ「くっ、失態だ…」

苦虫を潰したような顔をする黒の騎士団首領、ゼロもといルルーシュ。実は先程、彼はコニン曹長と名乗るレッドショルダーの戦闘員と奮闘していたのである。もっとも、彼はNMFの操縦は人並みなので、プロの傭兵であるコニンとはマトモに殺り合えば、確実に自分がやられる可能性が高いので、今いる樹海を利用して追手を振りきった所なのである。

ルルーシュ（まさか伏兵が近くにいたとは…、一刻も早くカレン達と合流しなければ…）

黒の騎士団は連日勝利を取ってはいるが、それはルルーシュの戦略とカレン達などの協力者が一緒にいてやっと得た勝利である。なのでそのどちらかが抜けてしまえば、コーネリアやレッドショルダーなどには確実に全滅させられてしまう恐れがあるのだ。

ルルーシュ「何とか動けば…ぐっ！」

ルルーシュが乗っている無頼改はコニンの襲撃によってかなりダメージを受けてしまい、動けるかどうかも怪しい状態だったのである。さらにルルーシュ自身も、襲撃のショックで左肩とギアスを憑依させている左目を負傷してしまったのである。

敵に遭遇する前に自分の陣営と合流しようとしていたルルーシュだったが、不運にも、敵に見つかってしまったのである。

ルルーシュ「しまった！もう見つかったか！しかもあれは…」

どうやら運悪くレッドショルダーらしきATに見つかってしまったのである。肩の形式が他のATと違うところを見て、どうやら隊長機らしい。

ルルーシュ「…？、なぜだ、なぜ襲ってこない？」

何故か敵のATはじつと無頼改を見ながら立ち止まっていた。

すると突如、向こうから通信が入って来たのである。

ルルーシュ「通信だと!? あいつ、どういつつもりだ?」

リーマン「そのNMF、乗っているのはゼロ、いやルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだな。」

ルルーシュ「何っ!!」

突然敵に自分の本名を聞かれ、ルルーシュは驚いた。

リーマン「伊達に戦乱のエリア11を生き抜いてきた訳ではないよ
うだな。コニンや他の隊員達はうまく撒けても、この俺はそう簡単
には行かんぞ!」

ルルーシュ（まさか俺の生存に気付いていた者がいたのか…!?!）

リーマン「私はレッドシヨルダー前線指揮官、リーマン將軍である
! ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、貴様の王の力、^{ギアス}どれほどのもの
かこの私が確かめてやる!」

ルルーシュ「あいつ、ギアスの事も知っているのか! ええい、戦闘
は避けられんか…!」

自分の生存やギアスの事まで知られている以上、ルルーシュ自身も
無視するわけにはいかず、多少の無理は覚悟の上で敵の司令官と戦
う事を決意する。

エリア11の樹海で、指揮官同士の戦いが始まったのである。

「策略家vs傭兵部隊隊長」(後書き)

ルルーシュ対リーマンとの戦闘開始です。表現の仕方がおかしかつたら遠慮せずに報告してください。

「血で血を洗いし戦い」（前書き）

- ・ フジの樹海に迷い込んでしまったルルーシュは、そこでレッドシヨルダーの司令官、リーマン將軍に遭遇してしまう。自分の正体やギアスの事を知られてしまっている以上ルルーシュは彼と戦う事に・

「血で血を洗いし戦い」

（ナリタ山中 樹海）

無数の木が生い茂る樹海で、何発かの銃声が鳴り響く。

現在、ルルーシュがリーマン將軍と銃撃戦を繰り広げているが、人並みの操縦テクニクに加え、負傷しているルルーシュにとって最強の傭兵部隊の隊長が相手では、ハッキリ言って勝てる見込みがま
ずないのである。

ルルーシュ「くっ、さすがにこの状態はキツイか。」

リーマン「どうした？貴様の實力はこんなモノか！」

まるで玩具を弄ぶようにリーマンの乗るATがジワジワとルルーシュが乗っているNMFを追い詰める。

そして絶壁の崖によってルルーシュは逃げ場を失ってしまう。

ルルーシュ「しまった！」

リーマン「どうやら貴様は実戦は苦手のような。ならばここで死
ねい！」

大破寸前の無頼改は既に動ける状態ではなく、ルルーシュの命は風
前の灯であった。

ルルーシュ（俺は・・・ここで死ぬのか・・・何も出来ずに・・・
ナナリーすら守れずに・・・）

もはやこれまでと思ったルルーシュは力無く項垂れてしまう。いや、
正しくは酷く負傷した自分の身体の激痛に気を失ってしまったので
ある。

だがリーマンが引き金を引く寸前、彼の機体が別の機体を確認した
のである。

そしてその機体はリーマン自身の目にも移ったが、彼はそれを見て
啞然とした。

なぜなら、その機体は今まで見たこともない奇怪な姿をしていたの
だ。

リーマン「な！何だこれは！？一体何時からいたんだ？」

突如現れた謎の機体に即座に警戒態勢を取るリーマンだったが、間を置くことなく、さらにそれと同等の大きさを誇る未確認の機体が現れたのである。

さらにその巨大な機体が砲弾らしき棒をこちらに向けてきたのである。

どうやら巨大な機体は奇怪な姿をした機体を狙っているらしいのだが、このままでは自分自身も巻き添えを食らう事を悟ったリーマンは、即座にその場を離れていった。

リーマンがある程度その場を離れた直後、巨大な機体から強力な光線を放った。

斗牙「グラヴィトン、ノヴァアア！！！」

かなりの威力を放ったその光線は、奇怪な機体を粉々にし、樹海の一部が吹っ飛んでしまった。

リーマン「な、何という威力だ！こんな化け物のような機体、一体何時の間にこのエリアにまで来たのだ！？」

そこでリーマンはふと思った。

もしかしたらあれがエリア11に接近していた未確認の不法入国機なのだと察した。

リーマン（まさかここまで力を持っていたとは、こちらの計算外だったか・・・）

このままここに留まるのは危険と判断したリーマンはそのままその場を後にした。

ミズキ「ゼラバイアの撃破を確認。」

エイジ「何だ？今回のゼラバイアはあんまり骨がなかったな？」

リイル「グラヴィオンも私達もそれだけ強くなってるって事でしょ
うか・・・」

エイジ「これだけ強けりゃあ何にも問題いらないな！」

グラヴィオンと呼ばれる巨大な機体に乗っていた少年少女達が言っているゼラバイアとは、先程彼らが吹っ飛ばした奇怪な機体の事のようにである。

琉菜「何油断してるのよ！ここって確か今戦場になってる所よ。」
エイジ「やっぱあ！ここでのんびりしていたら捕まっちゃうんじゃないか……」

エイナ「そもそも私達無断で入っちゃいましたからね……」
リイル「不法入国者……」
エイジ「まずいだろそりゃあ！」

ミズキ「じゃあ、面倒事になる前にさっさと撤退するわよ。」
斗牙「ゼラバイアもないようだし、各員、撤退準備！」

エイナ「ちょ、ちょっと待って下さい！あれって……」
グラヴィオンの操縦士の一人、メイドのエイナがすぐ近くで何かを発見した。

それは先程リーマンによって大破寸前にまで追い詰められた無頼改であった

エイジ「あのぶっ壊れ寸前のNMFがどうかしたのか？」

エイナ「あの機体から生体反応があります。」

琉菜「え、誰かまだ乗ってるってこと？」

リイル「でもこの生体反応、かなり弱ってますけど。」

ミズキ「つまり死にかけているってことね。」

エイジ「何だつてえ！そりゃ大変だ！斗牙、撤退準備ストップ！人命救助しねえと。」

斗牙「了解！各員直ちに行動開始！」

グラヴィオンから乗組員が全員降りてきた。なんと乗組員はほとんどが女子供ばかりであった。

エイジ「ひえー、近くで見るとひでえなこりゃ。」

琉菜「殆どスクラップ状態じゃない。」

無頼改の状況を見てエイジと琉菜は呆気にとらわれていた。

斗牙「エイジ、この機体、箱を背負っているよ。」

大人しそうなしゃべり方をしたのは、先程のグラヴィオンのメインパイロットの斗牙である。ちなみにさつきと雰囲気が違うのは、彼自身が天然故か、機体に乗ると別人格になるらしい。バイクに乗ると人が変わるのと同じ原理みたいなものだ。

エイジ「いやいや、あれは箱じゃなくて操縦室だから。」

斗牙の天然ボケに思わずエイジが突っ込む。

ミズキ「え〜っと、これかしら？」

乗組員で唯一大人の女性であるミズキが無頼改の操縦室のハッチを開ける。

琉菜「本当だ、人が乗ってる。」

リイル「あのー、大丈夫ですか？」

反応はない。

琉菜「まさか死んだんじゃあ・・・」

エイジ「縁起でもない事言うな！」

エイナ「気を失っているのでしょうか？」

エイジ「じゃあねえ、俺が確に」

ミズキ「もう斗牙が確認しに行ったわよ。」

エイジ「あ、そう・・・」

エイジの気が抜けてる間に、斗牙が無頼改から降りて来た。

琉菜「あ、斗牙降りて来たよ。」

リイル「何か抱えてますけど・・・」

ミズキ「あれって・・・」

無頼改から降りてきた斗牙は誰かをお姫様だっこしていたのである。実はそれはリーマンとの戦いで気を失ったルルーシュなのであった・・・。

「血で血を洗いし戦い」(後書き)

グラヴィオン颯爽と登場です。最後の方は斗牙がルルルシユをお姫様だっこしています。なんか狙ったような事してますが一樣天然なので許してね。

琉菜「ってあんたが書いたんでしょー!!」

踊るアゴ「げぶしっ!!!」 琉菜に蹴り倒されました。

「合流」(前書き)

ルルーシュとリーマンの戦いは、ゼラバイアとグラヴィオンの介入で強制終了にされた、ゼラバイアを倒した斗牙達は、気を失ったルルーシュに遭遇する。一方でクロウは、ある人物に追いかけてまわされていた。

「合流」

「ナリタ山上付近」

ジェレミア「ええい、止まらぬか！その機体。」

クロウ「止めて欲しかったら銃撃つやめろ！危ねえだろ！」

現在クロウは、ブリタニア軍の純血派、ジェレミア・ゴツドバルトに追いかけてまわされていた。

ブリタニア人のみで構成されている純血派のリーダー、ジェレミアは現在、ゼロの策略によって敵の逃亡助力に加え「オレンジ」というあだ名をつけられるという屈辱を飲まされ、さらに降格された事によって純血派そのものが存続の危機にかかっている。そのため、彼は汚名返上のために躍起になっているのだ。

ジェレミア「ええい！テロリストめ、そんな言葉を信じるほど私は馬鹿ではない！」

クロウ「銃を撃ちまくりながら人の話を聞くななんて芸達者な事が出来るか！」

つまり今のジェレミアにクロウの話聞くなどはなから無いのだ。どうやら躍起になるあまり、クロウをテロリストの仲間と勘違いしているようだ。

クロウ（ち、このままじゃあやられんのも時間の問題だ。かといって勘違いのまま叩き落とすのも気分悪いし・・・）

クロウが逃げるか戦うかで悩んでいると、遠くの方から光線が飛んできたのである。

ジェレミア「ぐおおおお！！！」

光線はそのままジェレミアが乗っていたNMFを吹き飛ばしてしまった。

クロウ「す、すげえ・・・何だ今の？」

クロウが辺りを確認すると、北西の方角にガンダムらしき機体を発見する。

クロウ「ガンダム！あいつがやったのか？」

ヒイロ「任務完了。次の行動に移る。」

ヒイロが乗った機体、ウイングガンダムはそのまま何処かへと去って行ってしまふ。

クロウ「あゝあ、またガンダムに助けられちゃったな。ん？待てよ・・・」

ウイングガンダムを見て、クロウはある事を思いつく。

このままヒイロを追いかけていけば、黒の騎士団やその協力者に出会えるのではないかと考えたクロウは、早速ヒイロの後をこっそりついていった。

（ナリタ 黒の騎士団アジト）

クロウの予測通り、ヒイロを追いかけていったら何とか黒の騎士団のアジトらしき大型車を発見する。

クロウ「ビンゴ！どうやらこのようだ。」

さすがにこのままいけばすぐに見つかってしまうので、クロウは一旦プラスタを茂みの奥に隠して、アジトに潜入していった。

しばらくあたりを調べていると、アジトのブリーフィングルームらしき部屋から幾つかの話し声が聞こえてきた。

デュオ「え！じゃあそっちにもいなかったのかよ！？」

扇「ああ、探せる所は全部探してみたんだが・・・」

カレン「ねえ、葵の方はどうだった？」

葵「残念だけど、こっちも見つからなかったの。」

カレン「そう・・・」

カトル「トロワやキリコも見つけられなかったって。」

玉城「ま、まさかやられたんじゃないか・・・！」

カレン「馬鹿な事を言うな！ゼロがやられるなんて・・・」

カレン達の話盗み聞きしていたクロウは、自分の予感が当たっていた事を悟った。

クロウ（やつぱり、今黒の騎士団の所にゼロがないんだ！）

今現在の戦場が酷い被害を出している原因が、ゼロが行方不明になった事だとクロウは察知したのだ。

クロウ（だがそうなるかと解せないのは、なんで騎士団だけじゃなく、ブリタニアやレッドシオルダーも大きな被害を出しているかだ・・・）

確かにクロウの考えが当たっているなら、本来騎士団がブリタニア軍に制圧されていてもおかしくないはずなのだが、ブリタニア側も被害が継続している事にクロウは疑問を感じていた。

だがその時、騎士団の協力者の一人、五飛ウフェンがクロウの存在に気付いたのである。

五飛「っ！誰だ！そこにいるのは！」

クロウ（あ、やつべえ！）

玉城「だ、誰かいんのかよ！？」

カレン「まさか、ブリタニアの連中！？」

クロウ（やばい、このままじゃあ・・・、ええい！仕方ない。）

このまま隠れていてもすぐに見つかると感じたクロウは、両手を拳げて自ら出頭した。

クロウ「タンマタンマ、俺は敵じゃない。ほら、武器も持ってないから。」

朔哉「あ、本当だ。」

くらら「ていうか、誰？」

クロウ「俺はクロウ・ブルースト。アクションのテストパイロットだ。ブリタニア軍じゃないぞ。」

デュオ「アクションって確か・・・」

ジヨニー「現在起動兵器を開発している小会社ですね。」

カレン「なんでそんな奴が此処に居んのよ？」

クロウ「ちよいとある事情でここまで来たんだが、ここの戦場の酷さを見てほっとけなくてな。なあ、あんたら今ゼロを探してるんだって？」

カレン「あんなんでそれを！」
騎士団の一人であるカレンがクロウに警戒心をむき出しにする。
クロウ「まあまあ、別にあんたらと揉め事を起こす気はねえよ。むしろ一緒に探してやるうと思ってるな。」
扇「え！捜すの手伝ってくれるのか！？」
クロウ「ただし捜索料はキチンといただきます。」
カレン「はあ！？金取るの？」
クロウ「あいにく俺は借金持ちでね。どんなバイトでもキチンとお金はもらいたいのだ。」
くらら「うわ、がめつい。」
クロウ「その代わり仕事はきちんとする主義だ。」
扇「え〜っと、いくら払えばいいんだ？」
玉城（払うんだ・・・）
クロウ「100万G」
扇「はああああ！？」
デュオ「マジで言ってるのか！？」
くらら「がめついいにも程がある！」
ジヨニー「まさに守銭奴ですね。」
葵「いつペン死ねば？」
カレン「マジで死ね！ていうか弾けてしまえ（怒）」
あまりな高額に男性陣は呆れ果て、女性陣から軽蔑の目で見られてしまった。
クロウ「・・・じゃあ、100Gでいいです。」
扇「そ、それなら大丈夫だ。」
クロウ（ふっ・・・泣いてないモン！）
そう心の中で呟きながら凹んでいたクロウは、そのままゼロの捜索を手伝うことになった。

「合流」(後書き)

クロウさん、黒の騎士団と合流。そして成り行きでゼロを探すことに。

クロウ「な、なあ。やっぱりせめて1000Gは・・・」

カレン「いまさら繰り上げろって言うの？」

葵「男だったらいったん決めた事は貫きなさいよね！」

クロウ(くううう)、泣いてないんだからね！)

踊るアゴ(目から大量の涙が出ますが・・・)

「混沌の戦場」(前書き)

黒の騎士団のアジトに潜入したクロウは、ひょんなことから黒の騎士団とその協力者たちと行方不明のゼロを探す羽目になったのである……

「混沌の戦場」

「前線基地レッドシヨルダー用指令基地」

リーマン「いったいどうなっているのだ！状況を説明しろ！」

通信している隊員相手に激怒しながら問いかける。先程ルルーシュとの戦いの途中で割り込んできた化け物とスーパーロボットはゲッターロボ・ソレスタルビーイングもともと本来レッドシヨルダーが引き受けていたはずなのだが、何故か不法侵入者の入国を許してしまっていたのだ。

リーマン「ソレスタルビーイング及び不法侵入者は我々が片付けていたはずだぞ！何故侵入を許した！」

兵士「申し訳ありません。実は先程、正体不明の敵に襲撃され、我が部隊の3割が壊滅。しかもそこにインベーターまでやってきて戦場は混乱状態に陥っています。それと・・・」

リーマン「何だ？さつさと言え！」

兵士「別部隊からの情報なのですが、どうやらソレスタルビーイングとゲッターロボは手を組んでいるようです。」

リーマン「何だと！」

まさかガンダムとスーパーロボットが協力体制を取るとは思わず、それによる混乱が部隊の一部壊滅を招いたらしい。

リーマン（くっ・・・ただでさえ厄介な連中だというのに・・・）
このまま戦っても兵を無駄に消費するだけだと考えたリーマンは、部隊に撤退命令を下した。

リーマンが通信を切ると、後ろから赤髪の青年が声をかける。

「???」
「おやおや・・・よろしいのですか？」

リーマン「状況が解らん状態で戦闘を続けても悪戯に混乱を呼ぶだけだ。」

「???」
「なんだかつまらないですね。私が行きましようか？」

リーマン「それもいいが、貴殿にはやってもらわねばならん事がある。」

る。」

「????」「こちらにも用事がありますがねえ……」

リーマン「こちらの要件を澄ませてもらえば後は好きにやってくれて構わん。」

「????」「それならいいでしょう。さて、この混乱を楽しんできますか。」

(アリー・アル・サーシエス、この男、まるで血に飢えたハイエナだな……)

赤髪の青年アリー・アル・サーシエスは、中東の傭兵部隊「PMCトラスト」から派遣されてきた傭兵の一人である。そして彼の用事とは……

サーシエス(反逆者である元皇子の捕縛、正義の味方気取りのテロリスト狩り、謎のスーパードボットの破壊……どれも楽しそうだが、まずはガンダム、てめえらと遊んでやるぜ!)

サーシエスの狂気を含んだ瞳がガンダムのデータを映す……

↳ナリタ付近 市街地↳

現在戦場になっっているナリタ山の麓にある町では、現在進行形で避難や医療が行われている。戦場での混乱は、近くの町の人達にも多大な被害を出していたのである。

赤木「こ……こりゃあヒデえ。」

タケル「ここにいる人達は全員被災した人達のようにだ……」

被害の現状に啞然としていたのは、先程警備達を振り切って無理やりここまで来た赤木達であった。

隣にいたタケルもこれ以上の言葉が出なかった。

甲児「赤木さん、タケルさん、ぼさっとしてないで俺達も何か手伝わないと!」

ワツ太「そうだよ!ここまで無理に来たんだ。きちんと手助けしないとね。」

赤木「そ、そうだな。よし!21世紀警備保障の底力で皆を元気に

するぞお！！タケル、お前も手伝ってくれ。」

タケル「あ、ああ。わかった。」

甲児とワツ太の言葉を聞いて、赤木達は気持ちを切り替えて救援に差し掛かった。

城田「赤木と青山、甲児君とタケル君は怪我人と医療器具、それと食糧などの運搬を！」

赤木「了解しました！」

城田「さやか君といぶき君と郁絵君は避難している人達に飲み物や毛布を提供して差し上げなさい。」

さやか・いぶき「はい！」

梅麻呂「我々もお手伝いいたしますぞお！」

木下「了解です専務。」

厚木「ワシ等もお手伝いいたしますぞお。」

さすがは上司と部下のコンビネーションである。城田と梅麻呂の的確な指示に赤木達の迅速な対応に滞りかけていた医療や配布が進んでいった。

???「あ！あなた達は！」

赤木達を見かけ、一人のブリタニア兵が声をかける。

赤木「あれ？あんたさっきの兵士さん？」

赤木達に声をかけたのは、道路の封鎖エリアで上官に報告を持ってきていた兵士であった。

対田「申し遅れました、自分は対田たいだ 宗助そうすけ二等兵と申します。」

赤木「対田宗助？あんたって日本人なのか？」

対田「いえ、自分は今は名誉ブリタニア人でありますので。」

名誉ブリタニア人とは、日本人が疑似的にブリタニアに人権登録する為にある権利で、植民地の住人である人達が唯一正式に人として扱われる人種の事である。

もともと、格差社会が激しいブリタニアでは、名誉ブリタニア人はあまり良い扱いは受けてるとは言い難いものである。

赤木「あ！す、すいません！」

対田「いえ、今は上司がいないんで構いませんよ。それより一つ頼みたい事があるんですが・・・」

赤木「え、俺らにツスか？」

対田「はい、実はあちらの方で亡くなった方の遺族がいますので、その方達の介護をお願いしたいんですよ。よろしいでしょうか？」

赤木「ああ、全然大丈夫ツスよ。」

対田「良かった、では赤木さんはあっちの女の子の相手をお願いします。自分は他の人の介護をしないといけないので。」

赤木「わかりました。頑張ってくださいね、対田さん。」

対田「はい。」

そう言つて対田は他の遺族たちのもとへと向かつて行つた。

赤木「さてと、ああ、あの子ね・・・」

赤木は指定された少女のもとへと向かい、そつと声をかけた。

赤木「あのー、大丈夫ですか。」

赤木が相手をする事になつた少女は、赤みがかつたオレンジ色の長髪に学生らしき制服を着ていた。

???「あ・・・はい・・・」

少女は元氣なく返事をした。無理もない。この少女もまた、大切な人を失つたようなのだから・・・

赤木「忙しい所申し訳ないんだけど、俺でよかつたら相手になるよ。」

???「でも・・・」

赤木「いいのいいの。悲しい時は、誰かが一緒にいた方がいいからさ。」

???「すみません・・・」

赤木「とりあえず自己紹介をしとかねえとな。俺は赤木って言うんだ。よろしく。君は・・・？」

シャーリー「シャーリー、シャーリー・フェネットです。」

なんと、赤木が声をかけた少女は、ルルーシュの同級生のシャーリーなのであつた・・・

「混沌の戦場」(後書き)

久々の日本組登場です。一様人々を助ける仕事をしているという事で人命救助や被災者の慰みをしてもらいました。一部原作と違うところがありますが、まあそこは二次元小説という事で多めにお願ひします。

「悲しみの心」(前書き)

ナリタでの被害に会った人達の介護に回った甲児達、そこで赤木はひとりの兵隊に頼まれて、ルルーシュの同級生であるシャーリーと出会う。

「悲しみの心」

（ナリタ付近 避難所）

赤木「そうか・・・、お父さんを亡くしたのか・・・」

シャーリー「うん・・・、私のお父さん、この辺りの会社で働いていたの。だけど・・・」

どうやらシャーリーは自分の父親を亡くしてしまっただけらしい。彼女の話によると、ナリタで土砂崩れが起き、彼女の父親がいた会社もろとも土砂に埋まってしまったらしい。

シャーリー「もつと早く救助に向かえば助かっていたかもって言われた。だけど、化け物が現れて救助が遅れてしまったって・・・」

赤木「そうか・・・そいつは辛いよな・・・」

突然家族を失った人達の悲しみは赤木には痛いほど理解できた。彼自身も「ヘテロダイン」と呼ばれる正体不明の怪物による被害者の中にも、家族を亡くした事によって深く悲しんでいた人達もいた。赤木にとってヘテロダインで家族を失い悲しむ人達の絶望は自分にとっての絶望と同じぐらいなのである。

シャーリー「私のお父さん、すごく優しくて・・・一度もぶたれた事がなくて・・・私の大好きなお父さんだったの・・・なんでお父さんは死ななくちゃならなかったの・・・」

シャーリーの眼からぼろぼろと大粒の涙がこぼれていった。

悲しみに暮れるシャーリーの姿を見て、赤木がそつと手をかける。

赤木「泣きたいときには泣けばいいさ。」

シャーリー「え？」

赤木「辛い時には泣く事も大事なんだよ。ずっと辛い事を背負っていたら、君のお父さんも心配しちゃうよ。優しいお父さんならなおさらさ。」

シャーリー「・・・うん」

赤木に励まされ、シャーリーは少しずつ落ち着きを取り戻していつ

た。

赤木「はい、ハンカチ。その顔じゃあ君の友達も心配するからさ。」
そう言つて赤木が向こうのほうを指すと、シャーリーの事を心配して一緒に来てくれたミレイやリヴアルの姿があった。

シャーリー「・・・そうですね。あの、ありがとうございます。」

赤木「いいつて事よ。困った時はお互い様さ。」

シャーリーは赤木に礼をし、自分を待つてくれていた友人のもとへと向かつて行つた。

赤木「さてと、俺も頑張らねえと！」

自分の頬を2・3回叩いて、気合を入れ直す。

しばらくして他の遺族達の介護をしていると、ある集団を見かけた。

市民「なんでまだ助けに行つてねえんだよ！」

市民「まだ私の息子がいるんですよ！」

「???」ですから、何度もおつしやつてるように、今あの場所は危険でとても救助に行ける状態じゃないんですよ。」

市民「それを何とかすんのがあんたら軍人の仕事だろうが！」

市民「ねえ、パパを助けてよ！」

「???」お願いですから落ち着いてください！」

どうやらまだ救助されていない人の親族らしい。自分の家族がまだ助かつていないので兵隊に救助を求めているらしい。赤木は迫られている兵士がさつき頼み事してきた対田である事に気がついた。

赤木「対田さん、どうしたんスか？」

対田「ああ赤木さん、この人達の身内がまだ被災地にいるみたいで

・・・」

赤木「だつたら今すぐにでも！」

対田「それがさつき本部から連絡が入つて、今戦場は化け物と黒の騎士団とソレスタルビーイングの四つ巴状態になつていて、危険すぎて入る事が出来ないんですよ。」

赤木「そんな・・・」

現場の状況を聞かされて、赤木は愕然とした。確かにそんな状態の

所に行くなど自殺に等しい。

だが赤木は、先程のシャーリーの事を思うと、無視できる事ではなかった。

赤木「なあ対田さん、救助できるような状況になればいいんスよね？」

対田「え．．．ええ、まあ、そうですね。」

赤木「だったら俺が何とかしますよ。」

対田「な！何言ってるんですか！向こうは他勢力が入り混じって危険な状態なんですよ！」

赤木「だから、そいつらは俺らが引き受けますんで、対田さん達はその間に人命救助をお願いします。」

対田「そんな無茶な！危険すぎます！」

赤木「無茶でも人を助けるのが俺達21世紀警備保障の義務ツスよ。」

そう言うのと赤木は他のメンバーを集め、事情を説明する。

青山「正気かお前！」

赤木「化け物なら俺達が何とかするのが常識でしょう！」

タケル「でも黒の騎士団やソレスタルビーイングは同じ人間ですよ！その人達と戦ったりしちゃマズイですよ。」

赤木「さすがにいきなり戦闘はしませんよ。出来るなら事情は説明しないとイケないから。」

甲児「でも聞き入れてくれるとは限らないんじゃあ．．．」

赤木「その時は救助が済むまでちゃんと相手になってやりますよ！」

青山「いや相手しちゃマズイだろ．．．」

城田「いい加減にしる赤木！そんな危険な事を承認するわけないだろっ！！」

赤木「危険は承知です！それでも行かないと今よりもっと酷い被害が出るツスよ！このまま被害を出し続けて何が21世紀警備保障ですか！！！」

甲児「赤木さん．．．」

城田「……」

赤木「……」

城田「……わかった、襲撃を許可する。」

しばらくの睨み合いが続いて、ようやく城田が折れた。

青山「マジですか!!」

いぶき「ウソでしょ!!」

赤木「さっすが城田さん!話がわかる人だぜ。」

ワツ太「ただ睨み合っていただけなんじゃあ……」

城田「ただし、今回はあくまで救助を済ませるまでの時間稼ぎだ。

救助が終わったらすぐさま撤退する事!それと黒の騎士団やソレスタルビーイングとはなるべく戦わないようにしろ!こちらにまで被害や怪我人が出れば本末転倒だからな。」

赤木「わかりました!!!行くぜ!青山、いぶきさん!」

いぶき「なんでこんな事に……」

青山「騎士団なんかと戦闘だけは御免だからな!」

そういつて、赤木達に続いて甲児やワツ太達も急いで準備に取り掛かった。

城田「対田さん、済みませんが人命救助をお願いしてもよろしいでしょうか?」

対田「わかりました。我々もご協力します。上司には私がキチンと説明しておきます。」

城田「すみません、お願いします。」

こうして21世紀警備保障及びその共同作業員達は、急いで戦場に向かう事になった。

「悲しみの心」(後書き)

まさかのスーパーロボット達も戦場に参加する事に。次回からさらに怒涛の展開になります。お楽しみに。

「只今搜索中」(前書き)

人命救助を行うため、戦場になったナリタ付近へ向かう事になった赤木達。一方でクロウ達は今も現在進行形でゼロを探していた・・・

「只今搜索中」

「ナリタ 黒の騎士団アジト付近」

クロウ「おゝい、迷子のゼロやあゝい。」

カレン「ゼロー！どこですかー！」

クロウ「母ちゃんが夜なべをして待つてるよあゝ。」

カレン「ってお前は真面目に捜せ！！」

アホな探し方をしていたため、クロウは一緒に行動していたカレンにドロップキックを食らってしまう。

クロウ「いで！！何すんだよ！」

カレン「あんたねえ、ちゃんと探す気あんの？」

クロウ「ふ、俺は金を出された仕事はきちんとやる主義さ。」

カレン「だつたらちゃんと探せ！」

クロウ「と言つてもなあゝ・・・ゼロを探すための方法がこれしかないとはな。後カレン。」

カレン「何よ？」

クロウ「あんま大声出すのはやめた方がいいぞ。敵に場所を教えるようなもんだ。」

カレン「・・・」

クロウに指摘され、カレンは黙り込んでしまう。カレン自身もそれはわかってはいるらしいが、主戦力のゼロがいなくなつて焦つてしまつているのが現状である。

クロウ（まあレジスタンスにとつちや頭がいなくなるのは痛いからな。）

ちなみに今カレンは他の搜索部隊と連絡をとつていた。

大勢で探すとデメリットなので、幾つかの搜索部隊とアジトに残る部隊に分けた。ちなみにどういふ風に分けられたかという・・・搜索班はクロウとカレン、チームDとデュオ、そしてキリコー人と3つの部隊に分散された。

アジトには扇や玉城、カトルやトロワ達はアジトに残った。もしかしたらひよっこりゼロが帰ってくる可能性も考えての行動だった。クロウ「・・・」

今度はクロウが考え込むように黙りこく。

カレン「どうしたの？まさか敵？」

クロウ「いや、そういう訳じゃない。ただ・・・」

カレン「ただ・・・、何よ？」

クロウ「気付かねえかカレン？」

カレン「何、何なの？」

クロウの意味深な言葉にカレンは疑問に思った。

クロウ「俺のプラスタにはステルス能力があつて敵に見つかる事がなかったからわかつたんだが、ここら辺あたりは確か結構な数のブリタニア兵やレッドシヨルダーがいたはずだ・・・」

カレン「え！あいつらいるの!？」

クロウ「いや、今はいない・・・」

カレン「なんだ脅かさないでよ・・・」

クロウ「というか、いなさ過ぎる・・・」

カレン「え、どういう事？」

クロウ「仮にもこの近くに敵のアジトがあるのに兵士が一人もいない・・・いや、それどころかこの辺り一辺は獣の気配もしねえ。静か過ぎる。」

カレン「そういえば・・・、なんか気味が悪い。」

クロウ「カレン、一旦機体まで戻るぞ！」

カレン「え？」

クロウ「なんか嫌な予感がする・・・、このままじゃあ本当に取り返しがつかなくなるかもしれねえ！」

カレン「あ！ちよつと待って！」

急ぎ足でプラスタを置いてきた場所へ向かうクロウ達。

その姿を遠くの方で何者かに見られていると知らず・・・

「ナリタ ブリタニア第1前線基地」

つい先ほどまで、この基地ではブリタニア軍とソレスタルビーイングとの戦闘が行われていた。だが現在は・・・

竜馬「ゲッタートマホーク！ブーメラン！」

巨大な赤いロボットが二つの斧を敵に向かって投げ飛ばした。

斧は見事に敵に命中し、敵は真つ二つになった。

竜馬「見たか化け物！ゲッターの恐ろしさを！」

隼人「油断するな竜馬、まだインベーターがいるぞ。」

武蔵「まあ随分いるなこりゃ。」

竜馬「へ、だったら一匹残らず根絶やしにしてやるぜ！」

ゲッターロボと呼ばれる機体が戦っていたのは、インベーターと呼ばれる正体不明の生物である。

インベーターの事は未だわからない事が多く、一つ確かなのは、人類の敵である事だけなのだ。

実はこの其地は、突如現れたインベーターによって壊滅させられたのである。

ティエリア「まったく、なぜ僕達がこんな事を・・・」

ロックオン「まあそう言うなよ。こんな化け物放つとくわけにもいかねえしよ。それに」

ティエリア「それに何だ？」

ロックオン「刹那はやる気満々だぜ。」

緑色のガンダムに乗るパイロット、ロックオンの指さす方には、インベーター相手に奮闘するガンダムエクシアと刹那の姿があった。

刹那「エクシア、インベーターを駆逐する。」

エクシアの両腕から出てきた刃で、何匹かのインベーターを切り捨てる。

アレルヤ「敵が怪物なら、遠慮しなくて助かるよ。」

可動式の機体であるガンダム・キュリオスのパイロット、アレルヤは、そう思う。

キュリオスが持つビームガンが、飛行型のインベーターを次々と撃

墜する。

武蔵「さすがはソレスタルビーイングだな、いい腕してるぜ。」
隼人「あんまり客観的になるなよ、武蔵、敵さんこっちにもいつぱい来たぜ。」

ゲッターロボの前に、無数のインベーターが襲いかかる。

竜馬「上等だ！一匹残らずぶっ潰してやるぜ！ゲッターアア、ビィイム！！！」

竜馬がそう叫ぶと、ゲッターロボの腹部分から、ゲッター線が凝縮されたゲッタービームが発射され、目の前にいたインベーターを吹き飛ばす。

武蔵「さすがだぜ、この調子でガンガン行くぜ！」

竜馬「おうよ、どんどん行くぜえ。」

隼人「お前ら、張り切り過ぎて事故るなよ・・・」

所変わってこちらはソレスタルビーイングの母艦であるプトレマイオス（通称トレミー）の中にある指令室である。

フェルト「エクシアとデユナメス、東方面のインベーター全滅を確認。」

クリス「ゲッターも北方面にいたインベーターを駆逐。」

リヒティ「現在、キュリオスとヴァーチェ、補給の為艦に一時帰還。両機に損害はなし。」

スメラギ「わかったわ、エクシアとデユナメスはインベーターを駆逐しつつ後退を。キュリオスとヴァーチェは補給完了次第、残りのインベーターの駆逐をし、ゲッターの援護に回って。」

クリス「スメラギさん、第1前線基地に在住していたブリタニア兵は全て撤退した様子です。」

スメラギ「ブリタニア兵は無視して構わないわ。私達はインベーターに集中しましょう。」

クリス「了解しました。」

転々と変わる戦場に的確な指示を出しているのは、トレミーの艦長、スメラギである。ソレスタルビーイングの勝利には、彼女の戦略予

報があつてこそなのである。

フェルト「スメラギさん、黒の騎士団はどうするんでしょうか・・・

「オペレーターの一人、フェルトがある心配をする。それはこのエリア11にいる黒の騎士団が自分達に対してどのような反応をしてくるのかである。戦争根絶を謳っている以上、おそらく彼らと戦う事は免れない事なのだと思いますが・・・

スメラギ「それならさつき彼らのアジトに通信を入れておいたわ。今の私達はあくまでインベーター殲滅を目的として来ているから、彼らが攻撃しなければこちらも攻撃しないって言っておいたわ。」
フェルト「そうですか・・・」

クリス「そう言えば、途中ですれ違ったあの機体は何だったんですようか？」

オペレーターの一人、クリスがある疑問を打ち出す。

彼らがここに来る途中、未確認の戦闘機らしき機体を幾つか確認したのである。

実はそれは、ゴッドグラヴィオンと呼ばれるスーパーロボットの部品の一つなのであるが、今の彼らはそれは知らない。

ラッセ「けどあいつらあつという間にいなくなっちゃったからな・・・

「リヒティ「何だったんスカね？あれ。」

スメラギ「まあ確かに気になる所だけど、今はその話は後。今はこの戦いに集中するのよ。」

フェ・ク・ラ・リ「了解」

気にするなと言ったスメラギだったが、彼女自身も未確認の機体が少しばかり気になっていたのである。だが彼女が気になっているのはそれだけではなかった・・・

「只今搜索中」（後書き）

ようやくソレスタルビーイングとゲッターのメンバーを出す事が出来た・・・ファンの皆様、長いことお待たせして申し訳ございませんでした。

ロックオン「まったくだ、もうちょっと頑張ってほしいぜ。」

踊るアゴ「すいません本当に。」

刹那「駄目だ、許さん。エクシア、作者を駆逐する。」

踊るアゴ「ぎゃあああああ！！！！」

ロックオン「刹つちやああああん！それ駆逐しちゃダメー！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585v/>

スーパーロボット大戦 the ZEXIS

2011年10月21日10時03分発行